

〈研究ノート〉

## 海女の表象

『ナショナル ジオグラフィック』に見るオリエンタリズムと観光海女の相互関係

小 暮 修 三

婦人の身で裸一貫直接身を躍らして海に入り、時代に背を向けた極めて原始的な方法ながら無尽蔵に海の幸を探る労作、殊にその生活はともすれば退嬰<sup>(1)</sup>に陥り易い婦女子の弱点を一蹴して、海国婦人の勇敢さと純朴さを見せている興味ある職業がある。俗に之を「海女」といふ。<sup>(1)</sup>

はじめに

かつて、日本の沿岸各地には、裸潜水漁を行いながら生計の主要な部分を賄う人々が存在し、彼／女らは俗に「海人（アマ）」と呼ばれてきた。海人でも特に、男性は「海士」、女性には「海女」と表記されている。この海人の歴史は古く、『魏志倭人伝』や記紀、『万葉集』から『枕草子』に至るまで、その存在が散見される。<sup>(2)</sup> また、海女をモチーフとした文学作品や能楽、浮世絵も数多く残されている。現在でも、観光対象として伊勢志摩の海女は有名ではあるが、もはや裸潜水漁で生計を立てて

いる海女の姿は、日本全国の何処にも見つけられない。

このような海女を対象とする研究は、一九三〇年代から民俗学を筆頭に、歴史学、経済地理学、医療衛生学、労働科学、社会学等において、数多く見つけ出すことができる。<sup>(3)</sup> 特に、民俗学においては、柳田国男から宮本常一に至るまで、海女が「古い時代の漁人の生活を想像させる」対象として研究され続けてきた。<sup>(4)</sup> しかしながら、海女の表象、特にその裸体の表象に関しては、浮世絵に描かれた海女についての記述を除き、<sup>(5)</sup> 特別な関心を持たれてこなかった。<sup>(6)</sup> むしろ、海女の裸体は、男性向けのグラフィックや映画等における性的対象として位置付けられてきたのである。

そこで本稿では、アメリカの「科学」雑誌として有名な『ナショナル ジオグラフィック』(National Geographic)の百年間に現れた海女の姿から、性的視線を内在させるオリエンタリズムの形成について考察する。ただし、そのような過去(二十世

紀」のオリエンタリズム批判「のみ」で、この考察を終わらせてしまえば、既存の反オリエンタリズム的枠組みに留まるだけの論考になってしまう。<sup>(7)</sup>そこで、太平洋戦争前の海女に関するナショナルな表象に触れると共に、戦後の『ナショナルジオグラフィック』における海女の表象を維持していたと思われる「観光海女」の存在、及び、海女をとりまく社会環境の変化を取りあげ、オリエンタリズムと国内言説の相互関係について考察を進める。

### 『ナショナルジオグラフィック』とは？

本稿では、創刊されて一世紀以上も経つという意味で、「世界中を見渡しても競争者のいない自然科学雑誌」として知られる『ナショナルジオグラフィック』に現れた海女の姿を分析の中心に据える。<sup>(8)</sup>さらには、その他の国内外の雑誌も横断的に見て、海女の表象を分析してゆくことにする。本稿の分析対象たる『ナショナルジオグラフィック』は、世界各地の自然・風俗・地理・歴史などに関する写真記事を掲載し、メインの購読者層たるアメリカ中流家庭の居間から世界に開かれた窓として捉えられてきた。<sup>(9)</sup>さらに、同誌は、全米の学校・大学図書館に常備されている雑誌でもあり、いわばアメリカにおける「教養のシンボル」として位置付けられてきたと言える。また、全米のみならず世界各国において、数多くの購読者数を誇るグローバル・メディアでもある。<sup>(10)</sup>

この『ナショナルジオグラフィック』は、一八八八年アメリカで設立された非営利団体ナショナルジオグラフィック協会の会員誌としてスタートした。同協会は、その創刊号で、発足の目的として「地理学の知識の向上と普及」を掲げている。<sup>(11)</sup>

そのため、近年でも七十億円以上の資金を基に教育財団を運営し、アメリカ国内十五万人の教師たち（約九十パーセント）が参加する地理学連合ネットワークの支援のため、毎年三億円以上の資金を費やしている。<sup>(12)</sup>よって、その影響力は、個人的な購買者のみならず、各種教育機関を通して子供や若者に強く及ぼされていると考えても良いだろう。そして同誌は、アメリカを中心とする「西洋」社会に暮らす人々に対し、特定の視線によって選択・分類された世界観をヴィジュアルの力による「真実」として提示し、世界をその視線によって「地図化」する強力なイデオロギー装置だとも言い得るのである。

そこで、同誌がどのような視線をもつて世界中の文化や人々を描き、選択・分類しているのか、という問題を中心に据える表象分析の先行研究について、その概要を見てみることにする。

### 『ナショナルジオグラフィック』に関する表象研究

まず、『ナショナルジオグラフィック』に関する表象研究の筆頭に挙げられるのが、キャサリン・A・ルズ&ジェーン・L・コリンズ (Catherine A. Lutz and Jane L. Collins) の『ナショナルジオグラフィックを読む』(Reading National Geo-

graphic)である。彼女たちは、一九五〇年から八六年までの『ナショナルジオグラフィック』に掲載された写真をサンプル分析し、そこに表れる非西洋人たちの特徴をエキゾチック（魅惑・風変わり）・自然（前近代）・理想（平和）・性（男性的視線）という四類型にまとめている。<sup>13</sup> すなわち、同誌に表れる非西洋人たちは、豊かな自然を背景に凝った民族衣装を身にまとい、西洋人にとっては「風変わり」な儀式を行い、それでいて牧歌的で美しく、男性読者に対して性的イメージを喚起させる人々、として典型的に描かれているというのである。

また、彼女たちのサンプル写真に限定すれば、同誌上の女性の裸体は全て非西洋有色人であり、西洋白人女性の裸は一度も登場していない。<sup>14</sup> 換言すれば、非西洋有色人女性の裸は、科学的な視点や教育上の配慮からしても性的対象として見なさない、という西洋的倫理が同誌によってコード化されているわけである。例えば、アメリカで多くの白人少年たちが初めて見る母親以外の乳房は、同誌に掲載された有色人種のものであることが指摘されており、さらにそのことについて親が目くじらを立てないのは「科学」雑誌たる『ナショナルジオグラフィック』ゆえだという。<sup>15</sup>

このようなことから、ルズとコリンズは、同誌がその読者層の大部分を占めるアメリカ白人男性に対し、前記四つの特徴を持ち合わせる非西洋人たちとの差異を強調・固定化する機能を果たしていると主張する。と同時に、西洋の普遍・標準・現実

的な特徴を浮き上がらせているというのである。そして、彼女たちは、『ナショナルジオグラフィック』が社会的行為としての人種差別主義と世界の見方としての人種的理解が深く染み込んだ社会的産物だ」と断言する。<sup>16</sup> さらに、同誌は、そういった人種差別を文化的・社会的差異として言説化することによって、世界中に蔓延する人種差別を維持・補完する機能を果たしているというのである。

続いて、人種差別主義を中心としたルズとコリンズの読解を受け、よりフェミニズムの観点から『ナショナルジオグラフィック』を読んだ研究も行われている。アラブ系アメリカ人フェミニストであるリンダ・ステート（Linda Sreet）は、オリエンタリズムとフェミニズムをその読解の中心概念に据え、同誌に描かれたアラブ人女性の表象を分析する。<sup>17</sup> 彼女は、「その雑誌『ナショナルジオグラフィック』における男性至上主義的レトリック、異文化交流の一方向性、客観性の主張、そして西洋からアラブへという世界的ヒエラルキー層を構築する表象」を研究対象とした。<sup>18</sup> そこから、同誌がアラブ人女性像を通して、既存のオリエンタリズムとセクシズムを再生産していると主張するのである。

そもそも『ナショナルジオグラフィック』とその発行母体であるナショナルジオグラフィック協会は、その発刊当初からアメリカ支配者層との親密な関係を持ち、異文化に対する西洋人支配と周辺化を容易にさせる意図があり、その編集方針は

写真一枚の選択についてすら徹底されている<sup>(19)</sup>。また、ダナ・ハラウェイ (Donna J. Haraway) によれば、一八九八年のスペイン戦争に際してアメリカ国民への地理教育の重要性が増すに従い、同誌が「植民地主義の利益、地理学、そしてアメリカの新しい所有物の可能性に重点を置く」ようになったという<sup>(20)</sup>。つまり、同誌が、非西洋地域・文化を「新しい所有物」として捉え、調査研究を行う対象と位置付け始めたというのである。

このような先行研究では、『ナショナルジオグラフィック』が、その編集権を握るアメリカ白人男性の眼差しに基づき、性的視線を内在させたオリエンタリスティックな言説として機能している、ということが指摘されている。同誌が、非西洋有色人の表象を通じ、西洋が非西洋的「他者」の意味と価値を再生産し、それを「真実」として固定化・自然化し、西洋中心主義に基づく非西洋支配と周辺化を推進させている、と考えられているわけである。

しかしながら、非西洋としての日本の海女に関する記事に限定すれば、『ナショナルジオグラフィック』の言説には太平洋戦争前後において断絶が見られ、先行研究によって指摘される点が、戦前の海女の表象からは読み取れず、むしろ、戦後に強化されていることがわかる。そこで次に、『ナショナルジオグラフィック』に現れた海女について、戦前・戦後の姿を具体的に見てゆくことにする。

## 『ナショナルジオグラフィック』の日本人像

『ナショナルジオグラフィック』は、創刊以来二〇〇九年現在まで刊行され続けているが、本稿では一九〇一年一月号から二〇〇〇年十二月号までの記事を分析の対象とした。この二十世紀という百年の間に、日本を中心とするテーマ及び日本人の写真を掲載した記事は、私が調べた限り百二十本以上に及ぶ。これら日本関連記事を見つけるにあたり、まずは一九八九年発行の「ナショナルジオグラフィック」総目録を用い、「日本」

をキーワードに記事を検索した<sup>(21)</sup>。続いて、それらに記載されたデータを参考にしつつ、一九〇一年から二〇〇〇年末までの雑誌千二百冊の全てに目を通した上で各々の記事を再確認した<sup>(22)</sup>。

結果、百四本の記事が選択され、その記事内容及び写真が分析対象となった。選択した記事の中には、あくまで別テーマの一部(時には写真一枚のみ)として日本を取り扱ったものもあるが、日本をメインとする記事のみに限定しても、その数は八十九本、ページ換算で計千八百頁以上、写真の数も千五百枚以上にも及ぶ。記事内容も、自然、自然災害、伝統・文化、風習・風俗、動物・生物、植民地政策、戦争、都市、人物、社会現象と多岐にわたる。その中でも、『ナショナルジオグラフィック』に登場する日本人の特徴としては、女性の被写体の多いことが挙げられる。その女性の中でも、職業的には「ゲイシヤ・ガール」が最も多く取り扱われており、第一次産業に携わ



図1 National Geographic Magazine, May 1905, p. 216. Photo by Hugh M. Smith.

る女性で特徴的なのは「茶摘み」と「海女」で、その姿もまた世紀を通じて幾度となく取りあげられている。<sup>(23)</sup>

#### 磯シャツの海女（太平洋戦争以前）

『ナショナル ジオグラフィック』誌上に初めて海女が登場し

たのは、二十世紀初頭、一九〇五年五月号の記事「日本の漁業」においてである。<sup>(24)</sup> そこでは、彼女たちが、伊勢志摩の真珠養殖に関連する形で、何代にもわたって特殊能力を継承する「アヒル人間」と紹介されている。<sup>(25)</sup> 同誌上初の海女の写真（図1）もまた、同号に「志摩地方の女性ダイバー」というキャプション付きで載せられている。<sup>(26)</sup> その海女たちは、磯シャツを身につけており、裸体姿は写されていない。ちなみに、志摩の真珠養殖そのものに関しては、その前年一九〇四年十月号のコラム記事「真珠と亀の養殖場」で既に紹介されており、後の真珠王・御木本幸吉に真珠養殖の可能性を示唆した箕作佳吉について記されている。<sup>(27)</sup>

それから四半世紀以上の年月を隔てた一九三三年三月号の記事「日本―旧世界の子供」において、海女の姿（図2）が再び登場することになる。<sup>(28)</sup> それでも海女は、真珠養殖との関連で取り扱われ、男性よりも水中に長くいられる「熟練した真珠ダイバー」と紹介されている。<sup>(29)</sup> さらに、それから五年後の一九三八年一月号の記事「日本の女性労働」においてもまた、海女は同様の扱いを受けており、前出一九三三年の写真と同カメラマンで、同現場での撮影とおぼしき別写真（図3）が掲載されている。<sup>(30)</sup> この写真はアングルの俯瞰から撮られたものではあるが、おそらく潮目や岬の緑樹から判断して、一九三三年に撮影した写真を使い回しにしたものであろう。そのどちらの写真においても、海女たちは磯シャツのようなものを身につけており、上





図2 *National Geographic Magazine*, March 1933, p 274. Photo by W. Robert Moore.



図3 *National Geographic Magazine*, January 1938, p. 126. Photo by W. Robert Moore.

半身が裸体ではない。続いて、太平洋戦争初頭、一九四二年八月号の記事「知られざる日本」においても、写真こそ掲載されてはいないが、やはり志摩の真珠養殖との関連で、海女を見ることが「興味深い経験」として語られている。<sup>(31)</sup>

これら太平洋戦争以前及び戦中の海女に関する『ナショナル

る。<sup>(33)</sup>つまり、海女が、日本を代表する産業に携わる特殊技能の持ち主として、また国家を代表する労働者として、ナショナルな枠組みの中で描かれているわけである。

ところで、志摩の海女の「服装」に関しては、一九一一年頃まで上半身裸で腰巻き一枚だったが、それ以降、上半身にはシ

ジオグラフィック』の記事では、御木本による真珠養殖との関連でのみ海女が注目されている。その結果、全ての海女の写真是志摩地方に限られており、裸潜水漁の写真のみならずその記述すら見当たらない。同誌における海女への眼差しには、ルズとコリンズが指摘するような性的視線が見受けられない。むしろ、海女は、「英国戴冠式や米国大統領の誕生日式典に見られる真珠」を養殖している日本の労働者であり、<sup>(32)</sup>「日本の好況産業」を象徴する存在として位置付けられている。

ヤツも着用していたらしい<sup>(34)</sup>。さらには、明治時代からの朝鮮半島沿岸への出稼ぎで済州島の海女からパンツをはくことも習ったという<sup>(35)</sup>。ところが、一般的にパンツは普及するに至らず、農山漁村経済更正運動に基づく生活改善指導により、「従来海女はシャツと腰巻一つで潜水作業をなし風俗上面白くないといふのでサル股の上にパンツをはかせ上衣は女学生の纏つてゐるやうなシャツを着用する」よう改善することが県に報告された<sup>(36)</sup>。その結果、一九三五年頃から白い天竺木綿で仕立てた磯シャツを着用するようになったというのである<sup>(37)</sup>。しかしながら、一九〇五年の『ナショナル ジオグラフィック』の写真では、海女が既に磯シャツのようなものを身につけていることがわかる。ここで、戦前期の別のアメリカ雑誌に目を移してみることにする。一九二三年創刊の雑誌『タイム』(TIME)では、一九二六年十一月十五日号で御木本幸吉の真珠養殖を取り扱った記事が載せられている。そこでは、海女らしき存在が「真珠の為に潜りにゆく五百人の少女たち」として触れられている<sup>(38)</sup>。ただし、彼女たちの記述はそれだけに留まり、裸潜水漁については全く触れられていない。しかしながら、写真誌として有名な『ライフ』(LIFE)の一九三六年創刊第三号には、「アメリカ人の新たな胸元のための真珠」と題された見開き写真記事が掲載され、その見開きページの大部分を占める六枚の写真には、サイジと呼ばれる褌を着けただけの海女たちの裸体が写されているのである(図4)。



図4 LIFE, December 7, 1936, pp. 20-21.

同誌に写されている女性たちは、「日本の真珠養殖産業で働いている」と説明されているものの、この写真を見る限り、明らかに志摩の海女ではない。まず、写真の海女たちは、志摩の海女が使う一眼式メガネを使っておらず、舢倉島で使用されるような二眼式メガネを着用している。また、彼女たちは、貝金と呼ばれる鮑などをはがす道具を腰に差しており、やはり真珠取りの海女には見られない道具を身につけている。しかも、写真のタライにはサザエやウニなど確認できるが、真珠貝を取っている様子が見当たらない。つまり、写真の女性たちが真珠取りの海女でないことは確実であり、高い確率で舢倉島の海女と推測し得るわけである。そしてもちろん、舢倉島の海女は、真珠養殖産業などでは働いていない。

さらに、同時期の日本国内の写真雑誌を見てみると、例えば、一九三三年六月十四日号の『アサヒグラフ』では、表紙を舢倉島の海女たちが飾っている。その表紙には、上半身裸の海女が四人、焚火を囲んで暖を取る姿が写されている。誌面でも見開き二頁計七枚の写真で、彼女たちの「サイジと呼ぶ男のもっこ襪に類するものを締めただけの本當の裸一貫」の姿が披露されている。<sup>(41)</sup>後に詳述するが、確かに、舢倉島の海女は一九六〇年代初頭まで裸潜水漁であった。そこから、『ライフ』では、写真に載せられた海女の働く姿の意味や価値が不問に付され、その裸体のみが真珠産業の説明という名目で利用されていると考え得るわけである。

太平洋戦争以前、海女の生活を描いた小説「海女」の作者である大田洋子は、次のように語っている。「海女の姿には、……犯しがたい風格や特別な美しさが感じられる。しかしそれを感じるには、彼女たちの労働の価値を知らねば到底だめ」だと。<sup>(42)</sup>少なくとも、前出の写真誌『ライフ』における海女の裸体写真は、同誌の内容（真珠取り）とは関わりのないものであり、海女の労働の価値に基づく「特別な美しさ」を切り取った写真とは到底言えない代物である。その被写体としての価値は、ルズとコリンズが指摘するような性的視線を内在させたオリエンタリズムに基づくものであると推測し得るだろう。

このように、太平洋戦争以前において、国内外の雑誌では海女の裸体が誌面を飾ることは確かにあった。ところが、「科学」雑誌たる『ナショナルジオグラフィック』では、日本を代表する産業に携わる職業的側面に海女の焦点が合わせられ、彼女たちの裸体が性的視線に基づいて読者に晒されることはなかったのである。また、海女は、日本の花形産業を代表（表象）するナショナルな対象として位置付けられていた。日本国内雑誌における海女の記述でも、敵の水雷を爆破しようとする「海女の義勇奉公」が称賛されたり、<sup>(43)</sup>決戦下の海産食糧を確保する「海の女戦士」と称されたりなど、大日本帝国へ貢献する「海国婦人」として表象されていた。

しかしながら、戦後の『ナショナルジオグラフィック』においては、そのような海女の表象が一変することになる。先に



述べておけば、戦後の同誌では、海女が三回ほど（一九五〇年・七一年、及び、別企画の一部として八五年）取りあげられている。その前者二つの記事に海女の写真が掲載されており、しかもそのどちらにも海女の「服装」の時代的变化（裸体から磯シャツ、そしてウェット・スーツへの流れ）と逆行する形で、彼女たちの裸体姿が登場することになるのである。

### 裸体の海女（太平洋戦争後）

太平洋戦争終戦の直後、『ナショナル ジオグラフィック』の日本関連記事は、戦時中の軍事資料を中心に特集が組まれていた。そこから、アメリカ軍の攻撃による日本「本土」の傷跡が消え始めるに至り、一九五〇年五月号の記事「自由の道への日本の試み」に海女の姿がカラー写真（図5及び図6）で再び登場することになる。<sup>(45)</sup> その本文中では、御木本の真珠養殖が戦前同様に取り扱われているにもかかわらず、関連写真は志摩の海女ではなく「相模湾の初島で天草を採る海女」になっている。<sup>(46)</sup> そして、彼女たちは上半身が裸で写されているのである。

もちろん、「科学」雑誌たる『ナショナル ジオグラフィック』では、一九三六年の『ライフ』とは異なり、彼女たちを志摩の海女とは説明していない。しかしながら、何故、志摩の海女ではなくて初島の海女の写真なのか？ それは、海女の裸体があえて被写体として選び取られていることを窺<sup>うかが</sup>わせるものである。その疑念を明らかにするには、この記事の四年後に海女

のフィルム撮影を行ったイタリア人文化人類学者フォスコ・マラーニの撮影ロケ記録が参考になるだろう。<sup>(47)</sup>

一九五四年、マラーニは海女の記録フィルムを撮影しようと試み、その過程がロケ記録として残されている。彼は、先ず志摩を訪れ、「全く観光客のためにだけ働いている」海女の姿に失望する。<sup>(48)</sup> 次に、彼は初島を訪れる。そこでもやはり「海女文化の名残りといえるようなものは何もなかった」と嘆きながら、次の候補地である千葉県御宿に向かう。<sup>(49)</sup> そこで初めて「白い襦袢などは用いないで……いまもってすばらしい裸体のままにいる」海女を見つけ出す。<sup>(50)</sup> しかしながら、撮影は「観光客のための見世物」専用のモデルに限られており、失望感を抱きつつ当地を去っている。<sup>(51)</sup> 結果、彼は理想の海女のいる舩倉島にたどり着くことになる。もちろん、そこでも撮影の許可を受けるに足る信頼感を獲得する為に長い時間をかけた上、やっと撮影することが可能になったという。<sup>(52)</sup>

彼の辿ったルートは、『ナショナル ジオグラフィック』における海女の写真の流れ、つまり戦前の志摩から一九五〇年の初島、そして後述する一九七一年の舩倉島と奇妙なまでに一致する。同誌も磯シャツなど身に着けていない「裸体のままでいる」海女を追求めた結果なのだろうか？ とところが、一九五四年当時には「海女文化の名残りといえるようなものは何もなかった」という初島である。そこで、同時期の日本国内の写真雑誌に目を移してみると、一九四八年七月二十一日号の『アサ

『ヒグラフ』にも初島の海女が取りあげられている。そこには、小屋で着替えたり、赤ん坊に授乳する海女以外、上半身裸体の海女の姿は写されていない。しかも、その誌面では「今年もまた本場志摩半島から海女の一隊が繰り込んできた」と記されており、写真の海女たちが志摩からの出稼ぎであったことがわかる。<sup>(53)</sup>そこから、『ナショナル ジオグラフィック』に掲載された写真の海女は、撮影用として特別に裸体を披露したのではない



図5 National Geographic Magazine, May 1950, p. 630. Photo by J. Baylor Roberts.



図6 National Geographic Magazine, May 1950, p. 630. Photo by J. Baylor Roberts.

紛れもない事実である。もちろん、『ナショナル ジオグラフィック』に取りあげられた歌麿の絵以外でも、江戸時代の浮世絵や錦絵に描かれた海女は、上半身裸で描かれている。<sup>(54)</sup>しかしながら、それらは海女という職業的モチーフへの興味・関心というよりも、裸体美人画を描くための手段だと考えられているのである。<sup>(57)</sup>

前出の『ライフ』と同様、この『ナショナル ジオグラフィ

か、という疑念も生じてくることになる。<sup>(54)</sup>

続いて、『ナショナル ジオグラフィック』では、一九七一年七月号の記事「海女―日本の海の精」において、海女がメインの特集として取りあげられている。<sup>(55)</sup>ここでは、記事冒頭に喜多川歌麿による三枚組の浮世絵（「鮑取り」）が載せられ（図7）、海女の裸潜水漁についての「伝統」的連続性が強調されている。確かに、近世日本において、海女の「服装」が褌や腰巻のみで上半身裸であったことは、

ック』の記事もまた、性的視線に基づいた浮世絵の系譜を継ぐものだと言っても過言ではないだろう。同誌に掲載された海女の裸の写真は、同誌カメラマンの撮影ではなく、舩倉島の海女とされるナショナルジオグラフィック協会所蔵の写真(図8)である。同誌カメラマンの写した海女たちは、志摩半島国崎の海女であり、彼女たちは白い磯シャツを身に纏っている(図9)。しかも、舩倉島の海女とされる同協会の写真は、撮影時期が明確にされておらず、他の舩倉島の海女の写真には見られない白塗りの顔にした海女が写されている。舩倉島では一九六四年頃から既にウェット・スーツが普及しており、海女は裸潜水漁をやめている<sup>(8)</sup>。

つまり、『ナショナルジオグラフィック』は、同誌記事の取材対象とは関わりなく、撮影時期不明な写真を使用し、海女の裸体を掲載したということになる。そして、冒頭の浮世絵に描かれた裸体の海女という「伝統」が、その正当性の担保となっていると考えられる。しかしながら、それは同時に、裸体美人画を描くための手段の「伝統的」継承という皮肉にもつながっている。

繰り返しになるが、ルズ&コリンズのサンプル写真に限定すれば、『ナショナルジオグラフィック』に掲載された女性の裸体は全て非西洋有色人女性であり、西洋白人女性の裸は一度も登場していない。そして、太平洋戦争後から一九七〇年代初頭に至るまで政治・経済的に圧倒的に優位にあったアメリカとい

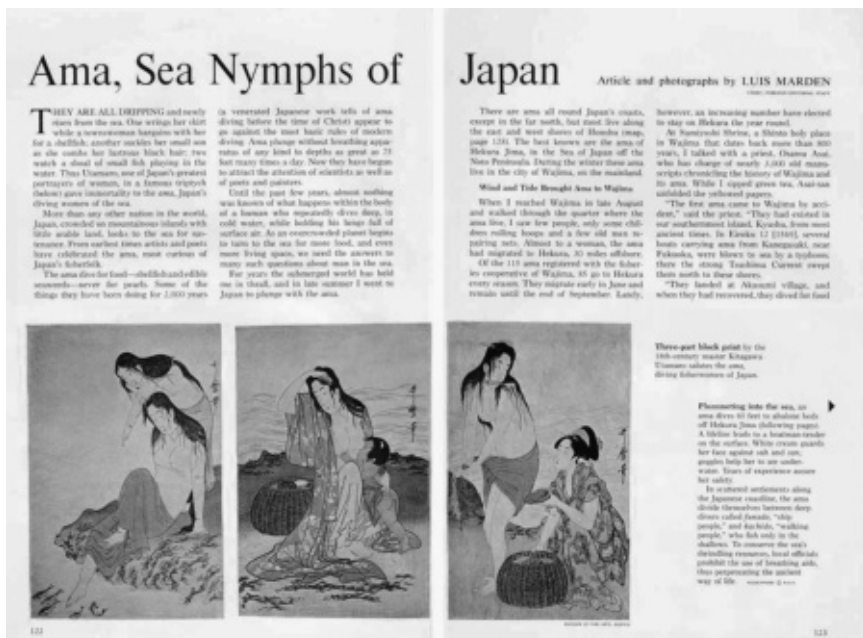


図7 National Geographic, July 1971, p. 122-123.

う国の「科学」雑誌においては、海女の裸体が同誌購買層たる中流白人男性向けの性的対象に直接的に結びつけられていた、と言えるだろう。少なくとも、前出『ナショナルジオグラフィック』における二つの記事の海女の裸体写真は、同誌の内容や海女の実際の労働とは関わりのないものである。このことから、戦後『ナショナルジオグラフィック』に登場した海女の裸体に、性的視線を内在させたオリエンタリズムを見出すことは容易である。また、その性的対象が作為的なものであったとすれば、同誌は「科学」の名の下に、購読者のオリエンタリズムティックな性的欲望を維持・補完していたとも言える。

もちろん、このような過去（二十世紀）の『ナショナルジオグラフィック』におけるオリエンタリズムを暴露し、それを単に批判することだけでは、本稿にとっても不十分である。それだけでは、レイ・チョウ（Ray Chow）が指摘するように、「文化的『他者』のステレオタイプのなリプレゼンテーションに内在する人種差別的・性差別的なバカな間違いを批判する自らの能力に自己満足する」だけ、つまり既存の「『反オリエンタリズム』の論争的枠組み」に留まるだけになってしまう。<sup>(59)</sup>そこで、オリエンタリズム・性的視線を維持・補完していたと思われる海女が存在、フォスコ・マラーニ曰く「観光客のための見世物」、すなわち「観光海女」に焦点を絞り、そのような彼女たちを取り巻く社会環境の変化についての考察に移ることにする。

## 観光海女——海女をめぐる社会環境の変化

太平洋戦争前から一九六〇年代半ばまでの間、千葉県の御宿で海女の写真を撮り続けた岩瀬禎之という地元酒造家兼写真家があった。その被写体となった海女が撮影当時の思い出を次のように語っている。

岩の井（岩瀬酒造）の旦那だけは、小屋に入って来て素裸の海女を写せたからね。ほかの者は、海女の撮影会の時だけ。東京の方から多くの写真家が来たもんだ……。若い女の子もみんなパンツ一枚で、オッパイも丸出したから、都会の人はきつとびっくりしただっぺよ。<sup>(60)</sup>

ここから御宿に限って言えば、海女の裸体が一般の視線に晒されるのは、特別な「撮影会」だけだったことがわかる。一九五〇年代後半には既に、「東京方面からのしろうとカメラマンが大勢、海女の姿を追って」いたらしい。<sup>(61)</sup>それも、「海女をモデルにした小説『海人舟』が芥川賞をとってから海岸地方の客集めに盛り場の見世物にこのところ大変なうけ方」をしていたという。<sup>(62)</sup>ちなみに、同小説は一九五六年に芥川賞を受賞したのみならず、その翌年に映画化もされている。そして、御宿は「アマチュア・カメラマンのメッカ」として位置付けられたのである。<sup>(63)</sup>





図9 *National Geographic*, July 1971, pp. 130-131.  
Photo by Luis Marden.



図8 *National Geographic*, July 1971, pp. 126-127.



図10 「御宿海女の撮影会」『海女—中村由信写真集』1978年、155頁。

このような撮影会専門の海女は、「自分の肉体と美貌と、潜水眼鏡とタライを資本に、もっぱらカメラの前に立つてモデル料を稼ぐいわゆるモデル海女」と批判的に見られてもいた。<sup>(64)</sup>また、御宿は東京から近いため、観光客や海水浴客が押しかけ、海女の撮影会(図10)のみならず、『海女芸者』<sup>(65)</sup>といって、夜の宴席へ出る人」まで存在したというのである。

加えて、小説『海人舟』(近藤啓太郎、一九五六年)が、『海人舟より―禁男の砂』(松竹、一九五七年)という「ヌード映画のはしりの作品」として映画化され、続編も二本製作された。

これからの一九五〇年代後半以降、海女をモチーフとした所謂グラマー女優主演の「エログロ」映画作品が新東宝や日活の手によっても立て続けに発表されている。<sup>(67)</sup>なお、一九六〇年代の海女をモチーフとした作品は、新東宝、大蔵映画、松竹といった映画会社によって断続的に発表され、さらに、一九七〇年代後半には、日活ロマンポルノの夏の定番として五本の作品が世に出されている。そこでは無論のこと、海女の裸体は性的対象としてのみ描かれており、観光海女への性的視線と相互補完関係にあったと考えられる。

そもそも、海女の裸体は、潜水作業の効率性を鑑みれば、衣類が水分を含んで抵抗を増すことを防ぎ、身軽で機敏な動作をしやすくするためだったという。しかしながら、上着を着けるようになったのは、保温効果と擦過傷予防の他に、「観光客が多くなり、裸体を人眼にさらして興味本位に見られることへの

抵抗」だったと指摘されている。<sup>(68)</sup>なぜなら、早くから観光地化したところほど、上半身への襦袢の着用が早い傾向にあったというのである。

さらに、観光地化の遅かった(つまり、海女が上半身裸体のままでいた)能登の舳倉島においても、一九六〇年頃から、夏には本土とを結ぶ定期船の運航に伴って観光客が増え、海女たちが裸体を隠さなければならなくなったという。<sup>(69)</sup>そしてついには、彼女たちが「潜ってアワビをとるところを観光客に見せなければならなくなってきた」<sup>(70)</sup>。そういった人に見てもらうために潜る海女を、民俗学者・宮本常一は「観光海女」と呼んだのである。この観光海女は、志摩を中心に発達し、やがて福井県の東尋坊、御宿、そして舳倉島へと拡がり、観光客(特に、海女の写真撮影を目的とした男性観光客)の性的視線の対象となっていた。

海女の潜る海が観光地化されると共に、上半身へのシャツの着用がなされ始め、「すばらしい裸体のままでいる」海女の数<sup>(71)</sup>は減少の一途を辿ってゆく。その減少過程では、逆に、観光海女やヌード撮影のモデル海女、そして海女芸者と呼ばれる者までが登場し、海女が観光地においてサービス産業化してゆく様子が窺える。そして、宮本は、「観光海女」をめぐる状況を指して、「人の働く姿が、観光対象になるようになってしまったことは、その職業の衰亡を物語る以外に何ものもない」と憂いたのである。<sup>(72)</sup>

しかしながら、それは決して海女たちの意志だけによるものだと考えてはならない。むしろ、海女を取り巻く社会環境の変化によって強く規定されているものである。戦後の荒廃から高度経済成長を迎えた一九六〇年代、産業構造も第一次産業から第二・三次産業へと移行し、国家による全国総合開発計画も展開され、さらには、所得の増した国民の消費動向が国内観光へと向けられた結果、海女という第一次産業従事者をめぐる社会環境が大幅に変化した。また、様々な技術の開発・変化に伴い、ウエット・スーツも普及し始め、早いところでは鳥取県の夏泊のように一九六〇年頃から、全国的に見てもだいたい一九六〇年代半ば頃からウエット・スーツ姿の海女が現れ始めた<sup>(72)</sup>。このような海女をめぐる社会環境の変化について、その変化が東京に近接するゆえに最も激しかった千葉県御宿の実地調査を一例として取りあげてみる<sup>(73)</sup>。

まず、海女の労働力の源である中学生の卒業後の進路に大きな変化があったという。かつて、海女の娘は幼い頃から海に入り、中学卒業と共に海女になっていた。しかしながら、若い女性の高校進学率の向上や大都市就職志向に伴って、海女を継ぐ者が減少したのである。一九七四年の地元中学校（御宿で唯一の中学校）での聞き取りによると、一九六〇年から七四年の十四年間で、中学卒業後に海女になった者はたった二名に過ぎなかったらしい。また、観光客数が一九六五年から一九六九年の間にほぼ三倍（百二十万人）に膨れあがり、観光地化に伴って

地元の民宿経営が増加したという。これには、海女の所属する漁業協同組合が民宿建築を奨励して住宅資金の貸付を行ったことにより拍車が掛かったという理由もある。このような傾向は、地域的特性・時間差こそあれ、全国的に同様であった。別例として、福井県の東尋坊などでは、観光資源に恵まれているゆえ観光客の増加はあったものの、民宿の数はさほど増加せず、むしろ海女が土産物屋で働いたり、彼女たちを支えていた男たちが観光船のガイドを務めたという<sup>(74)</sup>。

こうした海女を取り巻く社会環境の変化によって、海女という職業そのものが衰退し始めた。と同時に、彼女たちが男性的視線に基づいてサービス産業化し始めることにもつながっていったのである。ところが、このような海女衰退の過程において、戦後の『ナショナルジオグラフィック』は、「全く観光客のためにだけ働いている」海女しか残されていない志摩とは別に、観光地化の遅い地域を見つけ出し、海女の裸体を求めて初めは初島、後に舩倉島へと被写体の対象を移している。そして、仮にモデルの海女に被写体を頼ったとしても、また、たとえ撮影時期不明の写真を使っただとしても、取材対象たる海女の実際の労働とは関わりなく、その裸体を意図的に掲載したことは明らかであろう。しかも、一九七一年の記事に至っては、海女の裸体の「伝統」的継承性を強調し、「科学」雑誌として西洋人の被写体では決して許されない裸体女性の掲載を正当化したわけである。

もちろん、『ナショナル ジオグラフィック』における、このような性的視線を内在させたオリエンタリズムが言説として一方的に機能していたと言いはない。それを維持・補完するためには、観光地化された地域で生きる観光海女の存在なくしては成立し得なかったことも、また確かなことではある。ただし、問題の核心は、国内外を問わず、海女の労働の価値に対してではなく、その裸体のみに対する特定の視線にあり、海女を取り巻く社会環境にあり、宮本の言葉をもじれば、海女の働く姿を性的対象・観光対象にするような言説・社会構造にあるだろう。

#### おわりに

これまで見てきた通り、太平洋戦争以前の『ナショナル ジオグラフィック』では、志摩の真珠養殖と関連させる形で海女の職能的特殊性にのみ焦点が合わせられ、彼女たちの裸体が性的視線に晒されることはなかった。しかしながら、戦後の同誌では、海女の「服装」の時代的变化と逆行する形で、彼女たちの裸体姿が登場し始めることになる。『ナショナル ジオグラフィック』における性的視線を内在させたオリエンタリズムは、日本の敗戦後から初めて顕れており、それを補完したのがサード産業化し始めた「観光海女」という存在であることが読み取れる。つまり、海女の裸体をめぐる社会環境の変化が、オリエンタリズムを維持・補完することにつながっていたわけである。

ただし、そのような社会環境すら変化し続けるものである。先に少しだけ触れた通り、二十世紀『ナショナル ジオグラフィック』最後の海女の記述は、一九八五年八月号の記事「真珠」の一部にあり、そこにはミキモト・パール海外責任者の言として、次のような一言が記されている。「私たちは、養殖のための新しいオイスターを用意するのに、かつて女性ダイバーである海女を使っていたが、今やみんなオイスターの卵や子供をタンクの中で育てている」<sup>(76)</sup>。もはや海女の裸体はタンクの陰に隠れてしまったようである。

現在、衰亡した海女という職業は、もはや性的対象にすら値しない過去の遺物と見なされている。折しも、『ナショナル ジオグラフィック』同号の発行年と同じ一九八五年、日活ロマンポルノでも、『絶倫海女 しまり貝』を最後に、ポルノ映画の衰退と歩みを同じくして海女をモチーフにした作品は製作されなくなっていた。

そして、このような性的視線の不在状況こそ、海女をモチーフとしてオリエンタリズムと国内言説の相互関係について考察し得る好機と言えよう。今後、この相互関係について更なる考察を進めてゆきたいと考えている。



## 注

- (1) 安田亀一『海女の生活』社会教育協会、一九三三年、二頁。
- (2) 田辺悟『海女』法政大学出版局、一九九三年、二三―四五頁。
- (3) 海女に関する研究動向は、以下の文献に詳述されている。田辺悟『日本蜆人伝統の研究』法政大学出版局、一九九〇年、一五―二八頁。
- (4) 瀬川清子「蜆人の生活」柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗学会、一九四九年、一二九―一六四頁(引用・一五八頁)。
- (5) 田辺、一九九〇年、六四―六七頁、及び、一九九三年、六―六七頁。
- (6) ただし、一部例外としては、井上章一が、近代以降の肉体露出にまつわる羞恥心を検討する上で、海女の裸体を取り扱っている。井上は、一般的な女性の水着史が、階級的イデオロギ―に基づいていることを主張し、その反証例として海女の裸体を取りあげている。以下の文献を参照のこと。井上章一「見られる性、見せる性ができるまで」井上俊他編『岩波講座 現代社会学10 セクシュアリティの社会学』岩波書店、一九九六年、五九―七六頁。
- (7) サイドの『オリエンタリズム』に対する批判のひとつとして、固定化された支配―被支配の構図においてのみ「西洋」と「東洋」の関係性を捉えている点が挙げられる。このことに関して、ホミ・K・バーバ(Homi K. Bhabha)は、「サイド

には、植民地主義の権力と言説が、常に植民地主義者の手中に完全に収められているように暗示されており、それは歴史的・理論的単純化である」と指摘しているが、彼は、オリエンタリズムの形成過程がサイドの分析よりも複雑で、支配―被支配が双方向的なものであることを指摘している。以下の文献を参照のこと。Homi K. Bhabha, "Difference, Discrimination, and the Dis-course of Colonialism," in Francis Barker, *et al.*, eds., *Literature, Politics and Theory: Papers from the Essex Conference, 1976-84*. London and New York: Methuen, 1986, pp. 148-172. (引用・一五八頁)。

- (8) Mark Tungate, *Media Monoliths: How Great Media Brands Thrive and Survive*. London & Sterling, VA: Kogan Page, 2004, p. 163.

- (9) John Tebbel and Mary Ellen Zuckerman, *The Magazine in America, 1741-1990*. New York: Oxford University Press, 1991, p. 229.

- (10) アメリカの新聞雑誌部数公査機構(ABC)の調査によれば、『ナショナル ジオグラフィック』の発行部数は、二〇〇六年にアメリカ国内で約四百九十万部。アメリカ最大級の会員数を擁する全米退職者協会の会報誌を除き、日本でも馴染み深い『リーダーズ・ダイジェスト』(*Reader's Digest*)や『テレビ・ガイド』(*TV GUIDE*)などの雑誌に次いで、月刊誌第四位の発行部数を維持している。Magazine Publishers of America, *Circulation Trends & Magazine Handbook*, "Average Subscrip-

- tion Circulation for Top 100 ABC Magazines 2006.” [http://www.magazine.org/circulation/circulation\\_trends\\_and\\_magazine\\_handbook/22181.cfm](http://www.magazine.org/circulation/circulation_trends_and_magazine_handbook/22181.cfm)
- ちなみに『ナショナルジオグラフィック日本版』のホームページによれば、二〇〇七年時点で、同誌は、英語版以外にも二十九カ国語に翻訳発行されており、世界約百八十カ国、発行部数八百五十万部を誇っている。日経ナショナルジオグラフィック社ホームページ「よくある質問 (FAQ)」[http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/company/faq\\_nng.html](http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/company/faq_nng.html)
- (11) National Geographic Society, “Announcement,” *National Geographic Magazine*, October 1888, p. i.
- (12) C. D. B. Bryan, *The National Geographic Society: 100 Years of Adventure and Discovery*. New York: Harry N. Abrams, 1997, p. 489.
- (13) Catherine A. Lutz and Jane L. Collins, *Reading National Geographic*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1994, pp. 87-117.
- (14) 前掲書、一一五—一一六頁。
- (15) Tebbel and Zuckerman, 1991, p. 229.
- (16) Lutz and Collins, 1994, p. 157.
- (17) Linda Steet, *Veils and Daggers: A Century of National Geographic's Representation of the Arab World*. Philadelphia: Temple University Press, 2000.
- (18) 前掲書、五頁。
- (19) Lutz and Collins, 1994, pp. 47-85.
- (20) Donna J. Haraway, *Primate Visions: Gender, Race, and Nature in the World of Modern Science*. New York: Routledge, 1989, p. 157.
- (21) National Geographic Society and Wilbur E. Garrett eds., *National Geographic Index 1888-1988*. Washington, D.C.: National Geographic Society, 1989.
- (22) 加えて「ナショナルジオグラフィック日本版」の発行した以下の資料も参照し、日本関連記事の掲載号の特定確認を行った。ナショナルジオグラフィック編『ナショナルジオグラフィックが見た日本の100年』日経ナショナルジオグラフィック社、二〇〇三年。
- (23) 『ナショナルジオグラフィック』に表れる日本人の特徴に関しては、以下の拙書の第一章で詳しく解説しており、また「デイシヤ・ガール」に関しては、その第二章において詳細に分析している。小暮修三『アメリカ雑誌に映る日本人』オリエンタリズムへのメディア論的接近』青弓社、二〇〇八年。
- (24) Hugh M. Smith, “Fisheries of Japan,” *National Geographic Magazine*, May 1905, pp. 201-220.
- (25) 前掲書、二一七頁。
- (26) 前掲書、二一六頁。
- (27) National Geographic Magazine, “Geographic Notes,” *National Geographic Magazine*, October 1904, p. 427.
- (28) William Elliot Griffiths, “Japan, Child of the World’s Old

- Age: An Empire of Mountainous Islands, Whose Alert People Constantly Conquer Harsh Forces of Land, Sea, and Sky," *National Geographic Magazine*, March 1933, pp. 257-301.
- (29) 前掲書、二八七頁。
- (30) Mary A. Nourse, "Women's Work in Japan," *National Geographic Magazine*, January 1938, pp. 99-132.
- (31) Willard Price, "Unknown Japan: A Portrait of the People Who Make UP of the Two Most Fanatical Nations in the World," *National Geographic Magazine*, August 1942, pp. 224-252 (引用・二四〇頁)。
- (32) Nourse, 1938, p. 126.
- (33) Griffiths, 1933, p. 274.
- (34) 名古屋地方職業紹介事務局『三重県志摩半島「海女」労働事情』名古屋地方職業紹介事務局、一九三四年、三〇頁。
- (35) 宮本常一「海人ものがたり」中村由信『日本の海女』マリン企画、一九七八年、一三五—一五六頁(引用・一五〇頁)。
- (36) 『大阪朝日新聞(三重県版)』一九三三年九月二十日号。岩田準一『志摩の蟹女』アチックミュージアム、一九四〇年、一四頁より転載。
- (37) 津田豊彦「志摩の海女の磯手拭」森浩一ほか『日本民俗文化大系 第十三巻 技術と民俗(上) 海と山の生活技術誌』小学館、一九八五年、四三一—四三三頁(引用・四三一頁)。
- (38) TIME, "Notes," *TIME*, November 15, 1926. <http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,722730,00.html>
- (39) LIFE, "Pearls for the New American Neckline," *LIFE*, December 7, 1936, pp. 20-21.
- (40) 前掲書、二〇頁。
- (41) 朝日新聞社「荒海二十尋 海底に働く彼女たち 能登舩倉島のあま」『アサヒグラフ』一九三三年六月十四日号、一四—一五頁(引用・一四頁)。
- (42) 大田洋子「海女」『大田洋子集 第四巻』三三書房、一九八二年、二七四—三一七頁(引用・二九一頁)。
- (43) 松本青峰「志摩名物の海女生活」『女の世界』一九一七年九月号、一〇二—一〇五頁(引用・一〇五頁)。
- (44) 朝日新聞社「海女敢闘」『アサヒグラフ』一九四三年九月八日号、一四—一五頁(引用・一五頁)。
- (45) Frederick G. Vosburgh, "Japan Tries Freedom's Road," *National Geographic Magazine*, May 1950, pp. 593-632.
- (46) 前掲書、六三〇頁。
- (47) フォスコ・マライーニ『海女の島《舩倉島》』未来社、一九六四年。
- (48) 前掲書、三八頁。
- (49) 前掲書、四四頁。
- (50) 前掲書、四六頁。
- (51) 前掲書、四九頁。
- (52) マライーニは、前掲書において、日本の裸体観を古代ギリシアと重ね、裸体を悪とするキリスト教的・西洋近代的概念を批判し、「東洋の文明は、この裸体ということでは、特に日本

で、まことに驚くべき平衡を保っている」(一一頁)と舳倉島の海女の裸体を称賛している。しかしながら、彼の記録フィルムは、一九六三年に *VIOLATED PARADISE* として伊米合作で公開(日本未公開)され、内容的には、神社仏閣、祭り、アイヌの人々、海女などを撮した前編と、ゲイシャ・ガールやヌード・ダンサーを映した後編によって構成されており、全体としてオリエンタリスティックな「日本」が描き出されるだけの映画となってしまうている。彼の思いの如何を問わず、海女の裸体は、ゲイシャ・ガールやヌード・ダンサーの裸体と同様、西洋男性の性的視線に晒されることになってしまったわけである。

また、一九六七年に公開されたハリウッド映画『007は二度死ぬ』(*YOU ONLY LIVE TWICE*)では、日本が舞台となり、浜美枝がセックスシンボル(ボンドガール)として海女を演じている。ここで日本の性的表象として海女が選ばれたこともまた、西洋社会における海女へのオリエンタリスティックな視線の強さを物語るものであろう。

(53) 朝日新聞社「初島の海女たち」『アサヒグラフ』一九四八年七月二十一日号、一二一―一二三頁(引用・一二三頁)。

(54) 宮本常一によれば、「志摩の海女の出稼ぎの歴史は古く、すでに江戸時代に紀州や伊豆の方へも働きにいつていた」(一九七八年、一五四頁)という。そして、普段、裸潜水漁を行っていた舳倉島の海女ですら出稼ぎ時には、白いシャツとモモヒキを身に纏い、裸体を隠していたというのである。このような

ことを鑑みても、初島で写された海女が磯シャツを焚き火で乾かす以外、潜水時に上半身裸であることには疑問が持たれるわけである。

(55) Luis Marden, "Ama, Sea Nymphs of Japan," *National Geographic*, July 1971, pp. 122-135.

(56) 例えば、三代目歌川豊国「伊勢の海士長鮑制ノ図」や「二見浦海女鮑取之図」、二代目喜多川歌麿「江之島鮑獵之図」などが挙げられる。他にも、葛飾北斎などは艶本の挿絵(「蛸と海女」)を海女のモチーフで描いているが、このような海女の姿は直接的な性的視線に基づくものであり、それが海女という職業女性を称えているとは到底思えないものである。

(57) 田辺、一九九三年、六六頁。

(58) 中村由信『海女―中村由信写真集』マリン企画、一九七八年、一七頁、及び、北国新聞社編集局編『能登 舳倉の海びと』北国出版社、一九八六年、一五五頁。

(59) Rey Chow, *Ethics After Idealism: Theory-Culture-Ethnicity-Reading*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1998, pp. 74-75.

(60) 安藤操「『御宿町』歴史・民俗探訪記」岩瀬禎之『海女の群像 岩瀬禎之写真集』透土社、二〇〇二年、一四七―一五一頁(引用・一五一頁)。

(61) 新潮社「海女とモデル料 南房総の海女」『週刊新潮』一九五七年六月三日号、一二二頁。

(62) 文藝春秋社「御存じですか 海女」『オール讀物』一九五七



- 年十二月号、一九五—一九六頁（引用・一九五頁）。なお、「海人舟」が芥川賞を受賞する二年前には、三島由紀夫の『潮騒』（一九五四年）が発表され、同時に東宝によって映画化（『潮騒』東宝、一九五四年）もされている。同作品と観光海女「ブーム」とに相関関係を見出す資料は今のところ見当たらないが、多かれ少なかれ影響を与えていたことは容易に想像し得るだろう。
- (63) 玉川一郎「海女の御宿」『漫画讀本』一九五八年九月号、一九六—二〇一頁（引用・一九六頁）。
- (64) 額田年『海女—その生活とからだ』鏡浦書房、一九六一年、五八頁。
- (65) 中村、一九七八年、七三頁。
- (66) 朝日新聞社編『グラフ日本映画史（戦後篇）あゝ銀幕の美女』朝日新聞社、一九七六年、一〇一頁。
- (67) このような映画は、『海女の戦慄』（新東宝、一九五七年）、『人喰海女』（新東宝、一九五八年）、『海女の岩礁』（日活、一九五八年）、そして『海女の化物屋敷』（新東宝、一九五九年）と続く。
- (68) 千葉県教育委員会「房総の漁撈習俗調査報告 房総の海女・海士」千葉県教育委員会・東京都品川区教育委員会・東京都漁撈習俗調査団編『日本の漁村・漁撈習俗調査報告書集成（第三巻）関東地方の漁村・漁撈習俗（1）』東洋書林、二〇〇三年、一三一—一二二頁（引用・三〇頁）。
- (69) 北国新聞社編集局編、一九八六年、一五四頁。
- (70) 宮本、一九七八年、一五五頁。
- (71) 前掲書、一五五頁。
- (72) 田辺、一九九三年、二三九頁。
- (73) 阪野優『海女のいる村』中部日本教育文化会、一九八〇年、三—二〇頁。
- (74) 前掲書、七〇頁。
- (75) Fred Ward, "The Pearl", *National Geographic*, August 1985, pp. 193-223, cited p.203.